

笑えない笑いのある川柳



守田 則一

一、はじめに

盤寿を3年前に過ぎた筆者は現在福岡の地で町医者としてその日暮らしをしている。

思うに鹿児島で医学を学んだが、鹿大医学部の前身の薩摩医学には歴史がある、それについてはまたの機会にするが、明治維新の頃、西郷南洲先生の元で活躍した英国の医師ウイリアムウイルスのイギリス医学の伝統を誇る薩摩医学では、脚氣論争で森鷗外と対立し、その正しさを証明したウイルスの弟子海軍軍医高木兼広の名を挙げるだけで十分である。

筆者は薩摩の地で20年有余医学を学び、その地で多くの知己を得た。それ等を財産として、福岡大学に転出して永い間教職にあった。その後、大学の教職を離れ、町医者になった。あまり流行らぬ老医故に、大学時代の診療・教育・研究というめまぐるしい日々と比べ、じつくりと考える時間がたつぷりと有り余るようになった。患者が途切れる診療時間を有効に使うべく、診療机に着いたまま出来る趣味として川柳を始めた。カルテは診療記録よりは、川柳の走り書きの方が多いことがある。うっかり消し忘れて監査の時カルテには診療結果以外を記載してはいけないと指導を受けたことがある。

それはさておき、川柳は誰からも手ほどきを受けたこともない全くの我流である。五七五の一行詩のうち、何故に俳句でなく川柳を選んだかと言うと、開業を決意した時の筆者

は古代希な年齢にさしかかり、その歳になつて、季語を勉強するには遅すぎると思つたらである。しかも、大学受験勉強時代、国語の先生の俳句の知識と特に季語や語彙の豊富さその腕力は嫌と言うほど知らしめられておる。その先生方に限らず、大学で国文学を専攻する方々も俳句を作られる、評価は同じ土俵になる。最初から勝負はついている、降参である。やはりやる限りは当然同じ土俵で勝負するのが日本人として当然のことである。

その様に考えたなら、今更古稀の手習いではないと俳句への挑戦は諦めて川柳を嚙つて十余年が経つた。季語のない川柳ならば、また川柳は口語でよい、通常の語彙でよいとなれば年寄りでも過去の知識が生かされるであろうと勝手に考えて始めたのであるが、そのベースには筆者が後述する医学部の学生のととき、南日本放送MBCで放送された薩摩狂句が下

敷きになっている。しかし、始めてみて全てそれらが誤解であることに気づいた。その奥の深さ何一つを取り上げても簡単ではない。その中でも小生が最も簡単に考えていた笑いのある句というのが実は最も難しいと言ふことを思い知らされたことである。そこからこの随想が始まるのである。

二、笑いについての先人のさまざま(1)

脳科学者の茂木健一郎は、現在の脳科学の知見でも「人間はなぜ笑うのか？」の答えは用意されていない。笑いのメカニズムの全容は解明されずにある。笑いは未だ神の領域に属している⁽²⁾と述べている。言うまでもなく筆者もここで笑の医学・哲学・心理学・文学等々について議論するつもりは毛頭無いし出来るはずもない。それは「ただ一人無知な男がそれをなしとげるのみである(1)」とマルセル・パニョルが書いてるので、議論の

責任を彼に押しつけて、筆者はこの問題の学問的議論は回避する。ここでは筆者の前提となる笑いについて先人は、どのように考えてきたのかを議論することは、パニョルの『笑い』の翻訳者鈴木力衛の解説（文献（1）のp105）に登場する人物をみても向こう見ずの企てであることが分かる。鈴木は翻訳後の解説では、笑いの学説は歴史的には、プラトン、アリストテレス、キケロの考えから、出発して近代的な笑いの理論が生まれたのはホップズ以後のことで、そしてデカルト、ベイン、スタンダール、ボードレール、ダーウイン、フイエ、グロースらの説はこの流れの中にあり、19世紀になって、ショーペンハウエル、カント、フロイト、ベルグソン、などであり、彼等は矛盾もしくは対立の内に喜劇的な要素を見出そうとしたとある。しかし、これを説くためには原典を当たらねばならな

い。これはライフワークであり、一川柳好きのなせる技ではない。引用の原典を参照願うことにして筆者の拙い表題の随想へと進むことにする。

何はともあれ、筆者は或る川柳雑誌のいう「笑いのある句」いうのがどういう句であるのか理解出来ないことから笑いとは何かと改めて考えただけの事である。どのような句が川柳で言う笑いのある句なのか、笑いのある句が掲載されている限りはそれは笑いのある句に違いない。しかし、これを読んでも筆者は殆ど笑えない。笑いに対する生理学で言う閾値が一般の人と比べてずれているのだろうか、筆者が少し可笑しいのかも知れないと思ったりもした。しかし、寄席を聴いても笑えるし、ユーモア小説を読んでもゲラゲラ笑える。

では、これらと何処が違うのか、ニーチエ

はどんなふうに笑うか、どんな場合に笑うか、そこには人間性がはからずも表れる^③。

例えば人の失敗をおとしめて笑っているのか、意味合いのおかしさを笑っているのか、洗練された機知を面白がっているのか、と言うことであるといっているが、筆者は川柳の場合どうも後者を理解する能力が無いのであろう。雑誌に投句すべく何とか笑いのある句を作りたいと思っている筆者は真剣に悩んだ笑いのある句という欄がある限り、編集部にはそれなりの考え、あるいはたくらみ、定義みたいなものがあり、選者もそれなりの概念に基いて選考した結果の句が掲載されているに違いないと思いつの雑誌で笑いのある句はどのような概念のものを教えて貰いたく、次のような文を雑誌社に投稿した、勿論見事に没になった、その投稿文をここに再現しそれを叩きに少し考察を以下に進める。

三、著者の投稿し没となった笑いのある川柳論

筆者が某川柳雑誌に投稿して没になった文面を再掲すると以下の如くである。

「ベルグソンは笑いとは何を意味するかを問うた。・・・(略)・・・笑いは哲学・心理学・医学・文学の永遠のテーマでもある。おかしさがあつて笑いがある。そのおかしさの根底の共通項は何か。・・・(略)・・・美は対象にあるのではなく心にあると言われるが、美を笑いに置き換えても同様であろう。笑いは川柳の得意とするところであろう。しかし筆者には一番難しい。少なくとも笑いであるならば笑いの源泉がある。笑えない悲しい句も自己を笑えれば笑いと取るなら、悲しみも笑いと同義語である。笑いは人間だけのものであり、置かれた社会環境の中で人間は笑う。笑いは習俗を懲戒するとも小生は考え

る。川柳の笑いは元来の笑いの概念を越えた広義の概念を持つと掲載句からは読みとれる。笑いのある川柳論を詳しく知りたい、未熟者の小生にも分かる様に本誌で取り上げて頂けないだろうか。」と。

しかし、その後筆者の疑問に答えるような話しはその雑誌ではみることはないが、毎号笑いのある川柳コーナの投句の募集はある。したがって、筆者の笑いのある句とはどんな句を言うのかの概念は掴めないままで、疑問は未だに解決していない。それで、川柳の笑いのある句という縛りを離れて、元来笑いと何なのであるかと考察するのが一つのテーマとなった。

四、笑いの要素

上述の如く笑いと言えばベルグソンが通常バイブルになるので、彼の考えを引用してみる。彼は笑いとは何を意味するものである

うか？笑いを誘うものの根底には何があるだろうか？おかしさを生む空想力を一つの定義の中に閉じこめるつもりはないと、笑いの第1章の冒頭で述べている⁽⁴⁾。長谷川正昭は『笑いと癒しの神学』で、笑いはいうまでもなく、人間の喜怒哀楽の感情や情緒に関わるものである⁽⁵⁾が定義することはむづかしい、十人十色であると言っているが、これはベルクソンと一般である。

おかしさは純粹知性に訴えかけるものである。この知性は他の知性との接触を維持していなければならないというが、ショウペンハウワーは「笑いは、知的コントラスト、感ぜずにはいられない不条理」と言っているのも同じ文脈であろう。笑いは反響を必要としている。一つの集団の笑いなのである。一緒に笑う人たちが分かち合っている、殆ど共犯関係と言ってもよいものである。川柳でも笑

いがある限りそこにはおかしきがある、また、私たちが笑わせるのは何故か笑いを理解するには、それを社会という、笑い本来の環境の中に置き戻さなければならぬ。

これらを煎じ詰めれば、雑誌に掲載された川柳が笑えないのは、上述の笑いの要素を持つているに違いない笑いのある川柳を、概念として理解し得ないか、あるいは感情としても笑いを受け入れる素地がないと言うことにもなる。しかし、筆者は冒頭に述べた如く、以前MBC南日本放送の薩摩狂句の時間はいつもこの句を聞いて吹き出し、気分転換と自分自身の発見に大いに役だった。確かそれが始まったのは昭和33年で、時代的背景を考慮せねばなるまいが、それは筆者が医学部3年生のときで、何でも詰め込み主義の医学教育と学問のあるべき姿との間の矛盾を感じている頃であったので、薩摩狂句の笑いがどれ

だけ自分を救ったか分からない。カントは人生の苦勞を持ちこたえるには三つのものに立つ。即ち、希望・睡眠・笑いと言っている。当時の自分は薩摩狂句がカントと重なった日々であった。

その頃の要因が今の小生の心情に影響しているせいも、川柳誌の笑いある句の本質が理解出来ないままなのである。薩摩狂句は当然薩摩の地を背景としてある。薩摩の地は独特の民度がある、ジゴロでしか理解出来ないものがある。そのユーモアのセンス一つにしてもひと味も二味も違う、一種独特のものである。その背景にある薩摩文化の持ち味である。薩摩狂句は独特のエートスの背景を持つものでこれをここで民度と呼ぼう。薩摩狂句には笑いの要素がたっぷりつまっている。それにどっぷり浸った小生は関西系や関東系の川柳の持つ笑いとは何処かにはずれがあるの

かも知れない。しかし、鹿児島には全国的に有名な川柳の大家が沢山おられるので、薩摩狂句と薩摩の川柳を混同してはならない、これは別物であるというお叱りを受けるかも知れないが、笑いの本質は変わらないと思う。

それはモリエールの喜劇と川柳は違うと言うのと一般で、ベルグソンの言う笑いはあくまでも笑いに対する考察であり、文学の形態が異なっても笑う本態である人間は同じ人であり笑いそのものは変わらないと思うのである。柳田国男^⑥は、笑いとは何であるかを知るためにはかつて如何なるものを笑っていたかという問題から始めなければならぬと言っているが、時代的背景も無視出来ないと言ふことも知れない。本邦にもいろいろ笑いの文学がある。柳田国男は芭蕉の俳諧の中に笑いの源泉をみているようである。時代を遡れば瘤取り爺さんの話から、枚挙に遑がない。

笑うのは個人の勝手で、笑わないのも同じく個人の勝手で、理屈は要らぬと一応納得して筆を置かねば、笑いの議論は延々と続くことにもなる。この辺でピリヨドを打たないところの随想もオープンエンドとなる。

五、終わりに

友人の中西博士から頂いた原稿募集のお手紙には武漢コロナと日本のあり方云々とあり、小生も、医者 of 端くれとして、新型コロナ収束と免疫について、笑いの持つ免疫力との関係を川柳の笑いの効用としての笑いの医学を筆者は論じたかったのであるが、前提の議論が膨らみ、途中で止めにした。笑いの難病に対する治癒力の参考文献^⑦を一つだけあげるに止めて、いつか、中西博士とは差して話す機会があればそれを改めて纏めることにして、ここではペンを置く。

(もりた内科・胃腸科クリニック院長)

【参考文献】

- (1) マルセール・パニヨル(鈴木力衛訳)、
笑いについて、昭和28年、岩波新書
- (付録) スタンダール、笑いについて―困難
なる問題に関する哲学的な考察
- (2) 茂木健一郎、笑う脳、アスキー新書、
2009年 東京
- (3) フリードリッヒ・ニーチェ(白取春彦
編訳)、超訳ニーチェの言葉、デイスカバー
社
- (4) ベルグソン(増田靖彦訳)、笑い、光
文社古典新訳文庫
- (5) 長谷川正昭、笑いと癒しの神学、ヨベ
ル出版、2019年
- (6) 柳田国男、不孝なる芸術・笑いの本願、
岩波文庫
- (7) ノーマン・カズンズ(松田鉄訳)、笑
いと治癒力、岩波現在文庫

